
Winged Angel s ~片翼の天使たち~

緋崎 琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Winged Angels 〱 片翼の天使たち

【Nコード】

N8655V

【作者名】

緋崎 琥珀

【あらすじ】

始まりは、極東の地からの一本の電話。

私の娘たちを護つて欲しい。その一言が非公式暗殺傭兵部隊 - Unofficial Mercenary Assassin - に舞い込んできた。

若干十七歳の少年兵士、冬木マコトとパートナーのセリオ・マクスウェルは、上官に呼ばれて極東の地へと赴くことになった。

P r o l o g u e (前書き)

こちらは週一回の更新を目標とした作品になります。

Prologue

二〇〇四年、三月一日。

荒れ果てた大地には、枯れた木が散立さんりつしている。剥き出しの地面には水気がなく、乾いた風に煽られて砂埃が舞っている。星が瞬いた夜空に照らされる大地は、ますます冷え込んでくる気温を上回る勢いで冷たくなっていた。

その大地を、素足で走る人影があつた。

土で汚れた足には所々に傷痕があり、走っているうちに踏みつけてしまった石で切った傷だと分かる。傷口から流れる血は付いた砂に吸い込まれ足に張り付いていて、痛々しさをさらに感じさせた。

しかし、走る足は傷の痛みにも凍てつく大地にも止まろうとはしない。なぜなら、走る足音に合わせて後ろから夜気を引き裂くようなブレーキ音が鳴っていたからだ。

土煙を上げて、傾く車体を元に戻そうとする車があつた。

銃弾を弾く装甲板で覆われたオープンスタイルのオフロード車が、眼前の道をライトで照らしながら疾走する。車のライトとは別に、車体の上からは前方より先を照らす懐中電灯を持った兵士の姿があつた。

深緑のツナギのような軍服姿の兵士が、何かを探すようにライトをちらつかせる。被ったヘルメットから見える顔は、まるで逃げるウサギを追い回す獵犬のように醜悪へあひむじに歪んでいた。

「おい、いたぞ！」

ライトを持っていた男が叫んだ。それに合わせるように、運転していた兵士がアクセルを全開にする。砂埃をさらに激しく巻き上げさせると、車のライトが前方に人影を映し出す——先ほどの人影だ。あわや轢き殺しそうな車を、運転していた兵士がブレーキをめいっばい踏むことで止めた。耳を突き刺すようなブレーキ音と、背後

で立ち上がった煙に人影が倒れた。

乾いた大地に埃で汚れた手をつくつと、その小さな手の下から赤い色が流れ出た。

この地方ではさほど珍しくもない浅黒い肌。その上には検査用の繋着つなぎを一枚巻いただけの姿は、まだ歳若い少女の姿だった。

少女は、埃と汗で汚れた黒髪を払いながら顔を上げる。後ろを振り向く深緑をした彼女の目を、レーザービームのような鋭い光が射抜いた。思わず腕で顔を庇う少女に、車から声が掛けられた。

「お嬢ちゃん、いけない子だねえ。勝手に逃げ出すなんてお仕置きが必要だよ」

ライトを肩にかけながら車を降りる男の顔は、誰が見ても下種な考えを張り巡らせた笑みを浮かべている。その顔に、少女はひつ、と喉を鳴らした。

「いや、やめて……！ 私はもうあそこには戻りたくない！ 毎日毎日へんな注射をされて、気持ち悪い思いをして……。もう、あんな思いはしたくない！ いっそ、私を殺してよ……！」

ヒステリックに泣き叫ぶ少女に、近づいた男は耳を押さえた。排気音をかき消すほどの少女の叫びに、男は面倒くさそうに少女を見下ろした。

「安心しろよ。てめえはもうあそこに戻る必要はないんだからな。」

……ちえ。射殺命令が下されたから、殺やつちまう前に楽しませてもらうと思ったがよ……」

男の考えに、少女は目を見開いて小さく悲鳴を上げる。血のついた足を蹴るようにして、少女は男から離れようとした。

「なんだ？ 死ぬのは怖くないのに、男になぶ蹴られるのは嫌か！ はは……。だがよ、見たところお前みたいなガキには俺のナニは立ちやしねえんだよ。それに、そんな泥まみれでがりがりの身体、頼まれたってこっちは願い下げだぜ！」

「おいおい。お前がやらないんなら、俺に回してくれよ。こっちだって女日照りが続いてんだ」

運転席からの声に、男は振り返った。

「なんだお前。こんなガキが趣味だったのかよ」

まるで汚いものを見るような男の目に、運転席の男が表情を渋いものに変えた。それが面白かったのか、男はわかったよ、と言ってまるで道を空けるように横に退いた。

それに応えるように、運転席から降りてきた兵士に、少女はまたも悲鳴を上げた。

ライトを持っていた男よりも体格が大きな、筋肉質の黒人だった。隆起した肉体は熊のようで、禿頭の顔は先ほどの男の表情と遜色ない歪み方だ。

黒いタンクトップの下は迷彩柄の長ズボンで、怯える少女の姿を見るや否や、見る間に一部が隆起しはじめた。その顔に、少女はまたも悲鳴を上げた。

「や……やめて、嫌あ……！」

自分の腕を掴まれて、少女は泣き叫ぶ。それを見ていた男が、ライトの代わりに一丁の拳銃を腰から取り出した。

「ガキの喚き声は耳に響く……。やる前に殺しちゃダメか？」

「馬鹿やろう。泣き叫ぶのが良いんじゃないか」

「……俺には一生わからない考えだぜ」

好きにしてくれと言うように、男は両手を上げて車へと向かった。男は座席に座ると、足を伸ばして横になった。終わったら呼んでくれ、と相棒に声をかけると、返事はなかった。もうおっぱじめたのかとため息を吐くと、排気音にまぎれて音がした。

男はとっさに身体を起こした。聴きなれた音だ。男には馴染みのある発砲音。

「おい！？」

面倒になって殺っちまったのかと、男が立ち上がると、

「——おい、ジェイク？」

男は、女の腕を取って動かない同僚の名を呼ぶ。何があったのかと車を降りようとすると、ジェイクがその巨体をゆっくりと横たえ

させた。

「ジエイク!!」

駆け寄る男は、倒れたジエイクの前で膝を突く。見下ろしたジエイクの顔は、何があったのか分からないといった表情のまま、絶命していた。男には何があったのかを告げるように、ジエイクの頭、側頭部に黒い穴が空いていた。

穴の大きさから見て、本来なら頭がはじけ飛んでいてもおかしくない大きさの銃創。それがなぜ出来たのかに思い当たって、男は立ち上がると銃を構えた。

目の前で怯えている少女には目もくれない。少女が丸腰であるのはすぐに分かったからだ。そんなことよりも、男が気になるのはジエイクを撃った誰かだ。

男は頭の中で瞬時に思考する。

ジエイクを撃ったのは、間違いなく狙撃による一撃だ。それも、大口径の弾がぎりぎり人間の頭を貫く余力を残すほどの長距離からの狙撃。周囲を見渡しても、あるのは人ひとりが隠れるのは難しい枯れた木と、同じく隠れるほどではない岩があるだけだ。夜であるため、二十メートル先も満足に見えないが、暗闇の中から狙撃されたのか。

「だとしても、これは一〇〇や二〇〇の距離じゃ出来ねえ芸当だぞ!？」

男はそこまで思考して、この場にただ黙って立っているのは危険だということに思い当たった。

男は銃を持ったまま、乗ってきた車に乗り込もうとして、

「——!？ な、なんだ貴様!」

ライトを光らせた車の横に、人影が立っていた。

男からはその人影がはつきりと分らない。自分を照らすライトのせいで、光に隠れるように人陰は立っていたからだ。だがしかし、それでもなお男にはその人影が持つそれに気がついた。

自分が持つものと同じくらいの拳銃。

「くそっ！」

男はとっさに持っていた拳銃を人影に向けようとして、乾いた銃声が夜空に響き渡った。

少女は、自分を追ってきた兵士が二人とも倒れるのを目にして、ぽかんと口を開けていた。先ほどまで自分の身体を弄ぼうとしていた男も、醜悪な笑みを浮かべて自分に銃を向けようとした男も、目の前に広がる大地の上で眠っている。

「何が……」

あつたというのだろう。最後まで言葉を発するのを遮るように、倒れた男の奥から人が出てきた。

「……大丈夫か？」

声は、男の声だった。男というよりは、自分とさほど変わらない歳の頃だろう声。

ライトを背にして少女の前に現れたのは、真っ黒な服を着た少年だった。手には黒塗りの拳銃を持ち、東洋人を思わせる黄色の肌は首筋から上しか見えない。全身を黒尽くめにした少年は、男性の髪型にしては若干長い黒髪を揺らしながら、少女の前でかがんだ。

冷たく無機質な表情。氷のような瞳は、なんの感情も伺えないままに少女の姿をその表面に映し出している。先ほどの怯えの色はなく、今はただ何が起きたのかを理解できない少女の顔が、冷たい男の瞳で揺れていた。

「あなたは、誰？」

少女の言葉に、少年は答えない。その代わりというように、手にしていた拳銃を地面に置くと少女の腕を優しく取った。

「……あつ」

少女は見慣れた——少女の嫌いなその姿に小さく声をあげたが、少女はなぜか恐怖は浮かんでこなかった。少年が取り出した注射器の針が、ゆつくりと少女の浅黒い肌に刺さる。一センチほど入った注射器は、そのまま少年の黒いグローブをはめた指に押され、中の

透明な液体を少女の体内に押し込んでいった。

少女はすぐに、身体の異変を感じた。

ふわりとした浮遊感。それに合わせてだんだんと落ちてくるまぶたは、少女の抗う意志に反して垂れ下がっていく。

「安心しろ。目を覚ました時には、君は元の世界に戻っている……」

少女が聞いた少年の声は、ぶっきらぼうだが、どこか暖かさで安心感を感じさせる声だった。

身体を崩す少女を少年、冬木マコトは左腕で支えた。

あどけない寝顔を見せる少女に、マコトは初めて感情らしい感情をその表情に見せた。それは、何か大切なものを守れたことに対する安堵の色だ。

「なんだ、お前そんな顔も出来るんだな……」

背後の声に、マコトはすぐさま表情を消した。

マコト後ろには、肩に銃を構えた金髪の白人男性が立っていた。

マコトと同じ服を着た男は、癖のあるウェーブがかった長髪を風に揺らし、揺れた髪の内側から見える左頬には、古傷となった切り傷の跡が鼻横から耳に向かって伸びている。整った顔立ちはまだ若々しさを感じさせる青年と呼べる顔つきだ。

青年が担ぐ銃は、狙撃用に用意されたP S G 1だ。^{ヘッケラー&コッホ} H & K社製の狙撃銃であるそれが、青年の肩の上で逞しげに輝いていた。

「——他に敵は？」

マコトの言葉に青年、セリオ・マクスウェルは首を振った。

「周囲にはとりあえず見えないな。だが、ここでのんびりしていると戻ってこないこいつらを探して、増援が来る可能性もある」

地面に横たわる男の亡骸を見て、マコトは頷いた。

「……合流ポイントは、ここから四キロの海辺だったな。面倒になる前に急ぐ」

マコトは、地面に置いておいた銃、H & K社製のU S Pを腰のホルスターに戻すと、少女を抱きかかえた。そのままセリオの横を通

り過ぎて、男たちが乗ってきた車の助手席に、少女を寝かせた。セリオが運転席に回ると、マコトはセリオのPSG1を受け取って、車の後ろに回った。

二人乗りのオフロード車だ。運転席の後ろにある荷物置き場に足を入れると、そのまま後部の車体に腰をかけた。

マコトは着ていたジャケットを脱ぐと、それを助手席で眠っている少女の身体にかけてやった。防刃処理を施されたタートルネックのウェア姿になったマコトに、セリオはくすり、と笑みを浮かべる。「お優しいことで……」

「無駄口は叩くな。早く車を出せ」

はいはい、と答えたセリオは、前を向くとハンドルを握った。

「それじゃ。お姫様を無事に送り届けるために、ドライブとしゃれ込みますか！」

セリオがアクセルを踏むと、車が死体となった男たちを避けて、少女が目指していた道を走りだした。

星の瞬いていた夜空は、いつの間にか薄っすらと白んでいた。

File : 1 『始まりの三月』

一九四五年。

第二次世界大戦終戦後、アメリカ政府が発表した戦後におけるアメリカによる対日方針のひとつとして、財閥解体が行われた。

当時、日本国内の表立った財閥はこの発表に対して消極的な姿勢を見せるものの、当時財閥筆頭として名を示していた『三島』『安本』両財閥による、自発的な財閥解体の姿勢によって、状況は一変した。

両財閥の自発的行動に対して、GHQ経済科学局長レイナード・C・クレーマーによる圧力とも取れる呼びかけにより、財閥解体をやむなしとする姿勢が強まった。この発表後、数年で残りの表立った財閥、『三菱』『隅友』『如月』に対して日本国政府からの呼びかけが行われ、実質の財閥解体が決行された。

それから数十年。

財閥解体により大きくその規模と経済力を落としていった如月重工は、長きに渡る寒冷期を経て、現在になってその名を今一度日本経済界の一翼を担うまでの復活を果たした。

二〇〇四年 三月十日。

周囲を山と森に囲まれた場所があった。南西に広がる東京都の町並みを一望できる小高い山の頂上は、奥多摩と呼ばれる地域だ。日本経済の中心と呼ばれる東京都の一角でありながら、その場所は都会という言葉とは無縁の地となっていた。

舗装された道は数本しか通らず、ほとんどが崖と木々で覆われた山の頂上に、綺麗に整地された土地に堂々と構えた建物がある。汚れひとつ見当たらないコンクリートの壁が、敷地の周囲を取り囲むように口の形をしている。壁の上には鉄条網がねずみ講のように外に広がっており、唯一の入口となる正面門には、灰色の制服を着た

男が二人、微動だにせず立っていた。

男たちが立つ門の壁には、『如月重工本社』と書かれた表札が貼り付けられている。黒い石材に金色の字で彫られたその表札は、見るものを威圧する輝きを放っていた。

錆のない引き門から見える敷地内は、東京ドームが十数個はまるまる入るほどの大きさを誇っていた。

敷地の西半分を巨大な駐車場と滑走路が用意されており、色とりどりの車やトラックが駐車されている。そして、それを上回る大きさの鉄の固まりが、翼を休ませて止まっていた。

如月重工が所有する自社用機だ。

緊急時の着陸場として認められたこの滑走路には、如月重工の役員などが、この滑走路と飛行機を利用する。敷地を斜めに延びた滑走路は用意に飛行機の離着陸を可能とするほどの長さを持っており、滑走路の上には掃除をする人影も先ほどまでは見えていた。

そんな敷地内の滑走路を、小型の飛行機が空から降りてきた。

北からやって来た飛行機は、ゆっくりと速度を落としながら高度を下げ、内臓式の車輪を出すと、危なげなく如月重工の滑走路に着陸した。

飛行機の到着とともに、敷地内が騒然とし始める。

飛行機の誘導が行われ、飛行機が完全に停止すると、敷地の端から降下用の移動階段が出入り口に取り付けられた。青色のラインが入った扉が開くと、二つの人影が現れた。

先頭に立つのは、黒いスーツ姿が威圧感をかもし出す、浅黒い肌の男だった。

ブランド物のスーツを着たその男は、ネクタイまできっちりと締めた身なりだが、ワックスで固めた髪は固く、後ろに流している。無精髭をはやした男の顔は、空に浮かぶ太陽の光を腕で遮りながら、まるで猛禽類のような鋭い目を細め、小さく微笑んだ。

体格の良い筋肉質の男の後ろには、対照的に小柄な男が立っていた。

先頭の男が三十代半ばならば、後ろの男はまだ二十歳にも満たない青年だ。同じように黒いスーツをしっかりと着こなしているが、顔は日本人のような黄色で、顔は黒いサングラスで表情が分からない。

青年の手には、大事そうにジェラルミンのケースが握られていた。「よう、トメロ。とうとうここまで来たぜ。これから俺たちの仕事が始まるわけだが、やる事は分かっているな？」

粗野な男の英語に、トメロと呼ばれた青年ははい、と同じく英語で答えた。

「天下の如月重工様の敷地だ。よくもまあ、こんな大げさなモンをわざわざ用意して、こんな山奥の僻地に居を構えたもんだ」

「都心から離れているようなので、緊急時の移動には必要なのでしよう。むしろ、如月重工の顧客は海外の方が多い。妥当な選択だと思われませんか？」

トメロの言葉に、男はつまらなそうに息を吐いた。

「んなことは分かっている……。その海外のお客様が、俺たちなんだからな」

「ジェリベル……。分かっているとは思いますが、あまり派手なことは慎んでください。会長からの言いつけで私は……」

説教じみたトメロの言葉を、ジェリベルと呼ばれた男が、熊のような手でトメロの顎を掴んだ。万力のようなジェリベルの握力に、トメロは恐怖と痛みでうめき声を上げる。震えるトメロの手からジェラルミンのケースが落ちると、乾いた音を立てて、ケースが階段を降りていった。

ジェリベルはその音が不快だったのか、眉間に皺を寄せながら唾を吐き捨てると、トメロから手を離れた。

「おい、トメロ。大事なものなんだからちゃんと持っているよ。……」

……それと、あんまり俺に指図すると、殺すぜ」

とぼけたようなジェリベルの言葉とは裏腹に、ジェリベルの鋭い眼差しは一点の偽りもない輝きを灯していた。

十階建ての如月重工ビル。

その最上階にある社長室は、シンプルながらも贅を尽くされた内装をしていた。

国外から用立てられた最上級の皮製ソファの前に、重量感のある木製の机が窓を背に置かれていた。周囲には調度品の壺や名のある名画が飾られており、その場所だけで、何千万という金がかかっていることが分かった。

その部屋の窓側に、一人の男がいた。

身なりの良い服装をした男は、深緑色のスーツを着こなし、白髪の混じった髪を後ろに束ねた状態で、手にパイプを持ちながら窓の外を見ていた。

窓の外には、先ほどの如月重工に訪れた飛行機が離陸の準備を進めており、それを男が厳しい視線で捕らえていた。

疲労と年期の入った堀のある顔は、四十過ぎの年月を感じさせた。しかし、日本経済の一翼を担う企業の社長というには、その痩せた体軀はどこか頼りない印象を感じさせた。

部屋の中に、ドアをノックする音が聞こえてきた。

「社長。お客様がお見えです」

部屋の外で控えている案内係の女性の声に、男、如月智彦きつらぎともひこは来たか、と一瞬だけ表情を翳かげらせた。

「ご案内してくれ」

振り返りながら答える智彦に、入口のドアがゆつくりと開いた。

薄桃色の制服を着た女性に開けられたドアから、ジェリベルとトメロが部屋へと入ってきた。

「この度はようこそおいでくださいました。それでお話とは？」

先ほどまでの影の指した表情はなりを潜め、智彦は悠然とした社長としての顔でジェリベルたちを迎え入れた。

「やあ、如月の社長様。せっかちなのは良いが、この会社は客にお茶もださねえのか？」

流暢な日本語で告げるジェリベルに、智彦はいやはやと愛想笑いを浮かべる。智彦が促す前にジェリベルは来賓用のソファに腰を下ろし、無遠慮に足を組んだ。

それを見ていたトメロは表情を歪めていたが、智彦が笑顔で席を促すと、一礼してからジェリベルの横に座った。

ジェリベルたちの向かい側に智彦が座ると、先ほどの女性がお茶を乗せた盆を持って入ってきた。

緊張した面持ちで、ジェリベルの横でお茶をテーブルに置く女性に、ジェリベルはいやらしい笑みを浮かべながら女性を見つめる。それが女性の恐怖をさらに引き立たせているのか、女性の手はかすかに揺れていた。

「金持ちの会社は、スタッフも美人でそろえるようだな。日本人の女はどうにも好みにあわねえが、このお嬢ちゃんが悪くない」

「……ジェリベル。あまり恥をさらすような真似は慎んでください」
好き勝手をするジェリベルに、トメロは我慢が出来ないというように、厳しい言葉でジェリベルを制した。それにつまらなそうな顔をしたジェリベルは、女性から視線をはずすと、テーブルに置かれたお茶を手にとった。

「……君は行きなさい」

智彦に言われて、女性は逃げるように部屋を後にした。

ジェリベルが飲んだお茶に満足そうな笑みを浮かべていると、智彦が厳しい視線のまま口を開いた。

「それで、本日はどのようなご用件で参られたのでしょうか。私もロシアの方ではいまだ交流は浅い方でして、ロシア政府の依頼で来られたというあなた方のお話には、少なからず関心を持っております」

「そいつはこちらとしてもありがたい話だな。こちらもアンタの返答次第で、仲良くやっていけると思っているよ」

ジェリベルのどこまでも無遠慮な物言いにも、智彦は表情を変えない。これからの上客としての付き合いを考慮してのものでもあつ

だが、ここ数日のロシア政府の情勢を認識しての態度だった。

ジェリベルと智彦の間に緊張が流れるのを感じ取ると、横で大人しくしていたトメロが口を開いた。

「……ミスター・トモヒコ。こちらの話を進める前に、まずは数日前に我がロシアで起きた事をご存知だろうか？」

トメロの言葉に、トモヒコはぴくりと眉を動かした。

「それは、ロシアで起こった人体実験を行っていたという組織の事でしょうか？」

智彦の言葉に、ジェリベルがご名答、と手を叩いた。横で冷たく見つめるトメロに、ジェリベルは肩をすくめて手を下ろす。

「十代から三十代までの人間を誘拐し、非合法的な人体実験をしていたこの組織は、つい先日政府の下によって鎮圧されました。組織が行っていた研究は、表向きは新薬の開発のために行われた実験であり、死者も出ております」

「だが、それはあくまで表向きの話だ。政府はこの組織が行っていた実験が何かをほとんど解明できずに、手を拱いている。今も組織の人間を手当たり次第に探し出してはいるが、肝心のところは何一つ分かってはいやしねえ」

ジェリベルは楽しそうにトメロの説明を引き継いで、困惑する智彦に説明を続ける。

「ロシア政府は現場に残った証拠でそれらしいのをでっち上げているが、公表しているのはその中でも一角でな……。政府が掴んだヤバイことには、まったく触れていないんだ」

「……その、やばい事とは？」

探るような智彦の言葉に、ジェリベルはにやりと笑みを浮かべた。おい、とジェリベルの言葉に、トメロが手にしていたジェラルミンケースを開けた。中には数十枚の資料が入っており、他にもDVD-ROMやフロッピーディスク。あらゆる形で保存されたデータが入っていた。

ジェリベルはトメロが取り出した紙の資料をひったくると、それ

を智彦に差し出した。頬に汗を伝わせながら受け取った智彦は、極秘とだけ書かれた一ページ目をめくった。

「……………っ！？ これは！」

智彦の驚きに、ジェリベルはうれしそうに目を細めた。

「これが、ロシア政府が必死に探している人体実験の全容だよ。ここに書かれている事が世界に知られれば、ロシア政府もただではすまない。政府もこれらに関しては何う思うかを感じているようだが、確固たる証拠とともにこれを早いところ押さえたいんだろう」

智彦は、なぜこの男たちがこれをもっているのだろうと考えながら、次々と資料をめくっていった。

その内容は、およそ公開できるものではなかった。この中の情報がひとつでもあれば、即座にアメリカを中心とした国連が動き出すこともありえない話ではない。どうしてロシアの奥地で、このようなことをしていたのかと考え、

「まってくれ！ これはおかしい！ なんでこんなものが、ロシア政府の依頼を受けて来たお前たちの手にあるんだ！？」

智彦は声を荒げながら立ち上がる。焦りと恐怖で肩を震わせる智彦に、ジェリベルは剣呑な空気をまとって足を崩した。

前のめりになって、ジェリベルは下から智彦を鋭く睨みつける。

「そんなのは決まっているだろう。俺たちが、その組織の人間だからだよ」

思っても見なかった言葉に、智彦は表情を青ざめさせた。資料の内容が本当ならば、世界基準で第一級の犯罪者が目の前にいる。荒事の経験のない智彦は、立っているのも不可能で、震える足に手をつきながら座った。

「ロシア政府のせいで、俺たちの実験は中断させられた。だが、この実験を途中で止める訳にはいかないんだよ。だから、俺たちは力と体力のある企業にこの仕事を売り込みに来たんだよ」

「どうして……、よりによって、ウチなんだ……」

絶望の色を浮かべて、智彦は搾り出すように口を開いた。俯いた

まま顔を上げられない智彦に、ジェリベルはつまらなそうに鼻を鳴らす。

「あんたたちなら、この実験を完成させられるとウチのボスが判断したからだよ。あんたらの技術力と経済力があれば、半月ほどで実験は再開できる。前の組織はロシアのある企業を使っていたが、正直アンタたちほど優秀じゃない。俺たちは、アンタたちを買ってるんだぜ？」

「そんなこと、なににも有難くない！ 我々に、犯罪を起こせというのか！？」

反発するように立ち上がる智彦に、ジェリベルはゆっくりと立ち上がった。

「おいおい。アンタのところだって、アメリカに財閥解体をさせられてから、色々とおくどい事してきたんだろ？ だったら、この仕事だって同じじゃねえか」

ジェリベルの言葉に、智彦は息を呑む。それから一言も口を開こうとしない智彦に、ジェリベルはやれやれ、と言いながら懷に手を伸ばした。

拳銃でも出てくるのだろうか、と顔を引きつらせる智彦の前で、ジェリベルは二枚の紙を取り出した。

「なんて言ったかな、アンタの娘たち……。そうそう、ミホとサキ、だったか？」

ジェリベルの手には、ひとりずつ撮られた写真が二枚あった。どちらも高校生の女の子が映っており、片方は白いセーラー服に薄黄色のセーターを、もう片方は紺色のブレザーを着た少女だった。

違いは服装だけで、顔は恐ろしくくらいに二人とも同じ顔をしていた。

「双子の姉妹なんだってな。どっちも可愛いじゃないか、ええお父さん？ こんな可愛い女の子たちが、どこかの悪い奴に捕まって酷い目にあうなんて事、想像したくないよな？」

ジェリベルの言葉に、智彦の顔は屍のように土気色をしていた。

三月十四日。

都内の喧騒からは離れた場所に、住宅街に囲まれた高校があった。私立鐘陽高校は、戦前から続く近辺では有名な名門校だった。

周囲を木々と壁で囲まれたこの高校は、外から中を覗くことを許さず、入口にはいつも警備員の男が立っている。

欧州のルネッサンス様式の建築は、学校というよりは巨大な教会にも、要塞にも見て取れた。

正門をくぐってレンガ造りの道を通ると、大きな庭に出る。庭の中央には、羽の生えた赤ん坊の彫刻が中央に置かれた噴水があり、その周りを木製のベンチがぐるりと囲むように置かれている。その後ろには、円柱の柱に護られた円筒の玄関が聳え立っていた。玄関を中心に『ト』の字に左右対称に伸びる建物は、青みがかった壁と赤茶けた屋根で作られていた。

その建物の二階。

左側にある校舎の一角に、二年四組の教室があった。

中には男女三十名程の生徒が机に向かい、紺色のタイトスーツを着こなした女教師が、差し棒を片手に英語の教科書を見ていた。

昼も過ぎて午後の授業は、どこか間延びした空気が流れていて、生徒たちの意識はどこか上の空だった。隣同士でこそそそと話をする男子生徒たちや、折りたたんだノートの切れ端を回す女子生徒の姿に、女教師は気づいているのか額に小さく青筋を浮かべている。気の強さを感じさせる濃い化粧と縁のついた眼鏡からは、生徒たちの様子を見る鋭い視線があった。

今は教室の後方、窓際の一角にその視線は向いている。窓際の後ろで舟を漕いでいる女子生徒。学校の青い制服を着た彼女は、木製の机の上にノートを下敷きにして突っ伏していた。

彼女の横の席に座る女子生徒が、隣から回ってきた紙片の表面を確認すると、眠っている彼女の腕をちょんちょんとつついた。

「沙紀ちゃん、沙紀ちゃん……」

枝毛のない綺麗な黒髪がかすかに揺れるが、寝ている彼女は声を掛けられても起きる気配がない。背中まで伸びた髪は、整った顔立ちの寝顔を隠すように、一房たれるだけだ。薄く化粧した顔は幸せそうに寝息をたて、手入れのされた眠り姫の睫毛が、小さな寝息とともにかすかに動いている。それを見ていた隣の女子生徒は、困ったようにため息を吐いた。童顔な顔はどうしたものかと、丸く大きな瞳は思案する。丸く彼女には大きめな眼鏡を片手で直しながら、彼女は沙紀と呼んだ眠る少女の耳元まで顔を寄せた。

彼女の青い制服の上からでも分かる大きな胸元が、寝ているの彼女の机からはみ出た肘にかすかに当たる。

「ねえ、沙紀ちゃん。ちよつと起きてよ……」

囁くような声では、沙紀は起きる気配がない。こうなったら沙紀の身体を揺するしかないだろうかと彼女が考えていると、不意に床を打つ音に気づいて身体を元に戻した。とっさのことで、彼女は手にしていた紙片を沙紀の机の上に置いてきてしまい、やば、と表情を変えるが時すでに遅かった。

眠る沙紀の前で、紺色のタイトスーツが揺れる。

「……おい、如月^{きんづき}。私の授業はそんなに退屈か？」

女性にしてはハスキーな声で、教師は腕を組みながら沙紀を見下ろす。右手には丸めた英語の教科書。『? - A』という文字が沙紀の方に見えていた。

「あのう、尼崎^{あまがさき}せんせい……」

沙紀の横の彼女が、怯えながら笑顔を浮かべて教師に声をかける。それを鋭い視線で教師が射抜くと、彼女はひいっ、と表情をこわばらせてツインテールの髪を揺らした。

尼崎教師は沙紀に向き直ると、机の上の紙片に気がついた。眉間に皺を寄せながらそれを拾うと、紙片を沙紀の下まで回していた生徒たちがいつせいに視線をそらした。尼崎教師は複雑な組み立てで三角に織り込まれた紙片を開いていくと、中の字を確認してふむ、と頷いた。

周囲に視線を向けて一喝、

「お前たち。放課後になにをしようとお前たちの勝手だがな。せめて授業中はしっかりと黒板に向かえ。それが出来ないでカラオケやなんやらに行こうと考えるなど、十年早い！」

尼崎の大声に、生徒たちがびくつ、と身体を振るわせる。尼崎教師の一喝に目を覚まさない沙紀に、尼崎教師はほう、と口元を歪めると、丸めていた教科書を沙紀の耳元に添えた。

「——好い加減に起きんか、如月いいいっ！」

鐘陽高校しやうやうこうの正門前で、ため息を吐く少女がいた。

いつもは背筋の伸びた姿勢は、ため息とともに大きなくの字に曲がっている。その横を、ツインテールの髪を揺らした眼鏡の少女が楽しそうに笑っていた。

「災難だったね、沙紀ちゃんさき。でも、尼崎せんせいあまがさきの授業で寝ちゃうなんて、昨日は夜更かしでもしたの？」

可愛らしい声でたずねる親友に、如月沙紀きづきは、もう一度ため息を吐きながらじっとした目を向ける。

「いやあ、実はさ由香里ゆかり。昨日の夜スマッピートのラジオ聴いてただけだね。いつものお便り紹介が最後の方に回されてたのよ」

「スマッピート？ ああ、沙紀ちゃんの好きな木室卓巳きむろ たくみがやってる深夜のラジオ？」

「そうそう！ でさ、私が送ったお便りがいつ読まれるかと楽しみにしてたわけよ。でもね、番組自体が何かの緊急番組でずれ込むし、始まったかと思えばその緊急番組の追加情報とかでなかなか進まないしで……。気づいたら三時回ってたのよ」

それは災難だったね、と答える由香里にほんとともう、と沙紀はもう一度ため息を吐く。

「ほらほら沙紀ちゃん。そんなにため息を吐いてると、幸せがどっかに逃げちゃうよ？」

「……あなたはいつも元気そうで、幸せいっぱいみたいね」

いつも笑顔の親友に対するちよつとした嫌味だったのだが、由香里はうん、と嬉しそうに答えるだけだった。

帰り道を歩く二人は、駅に向かうために坂を下りていた。住宅街を抜ければすぐに街中に出る道は、学生の姿がほとんどだ。しばらく歩いて街中に出ると、沙紀たちは駅前の店を軽く見て回りながら、駅の改札へと向かっていた。

「あつ！ スマツピーの新曲！ よかったあ、発売日に買い損ねたの。ちよつと買つて来るね！」

小さな音楽ショップのウィンドウから、新曲コーナーを見つけた沙紀が、店の中へと走り出した。開いた自動ドアに駆け込んだところで、沙紀は出てきた人影とぶつかった。

「きゃっ!?!」

小さく悲鳴を上げる沙紀に、ぶつかった相手はとっさに沙紀の手を取った。

白く細い沙紀の手を掴んだ相手の手は、小さな切り傷をあちこちにつけたごつごつとした手だった。沙紀はぶつかった驚きよりも憤りを先に感じて、睨みつけるように相手を見上げた。

「すまない。だいじょうぶか？」

男の声だと分かった沙紀は、相手の顔を見て吐き出そうとしていた罵声を押しとどめた。

自分とさほど歳の変わらない少年が、じつと倒れそうになっていた沙紀を見ていた。目に掛かる黒髪は、全体的に少し長く、背の高い身体が沙紀を引つ張り上げるように大きくそれた。

引き上げられた沙紀は、相手を見ながら立ち直る。女子の中では背の高い沙紀は一六〇半ばはある。それと比較して、相手の目線はやや上向きになった。

「あんまりむやみに走らない方が良い。人込みが多いところでは、また何処かで誰かにぶつかるぞ」

まるで、自分がおてんばだと言われているようで、沙紀は思わず顔を真っ赤にして口を開いた。

「そんなこと言われても、大きなお世話よ！　あなたこそ、ぼうつと歩いてるからぶつかるのよ！」

沙紀の言葉にも、相手はなにを言うでもなくじつと沙紀を見ている。なんなんだこいつは、と沙紀はその少年の姿を見る。

黒いパンツにジャケットを着た姿。身なりは悪くなく、学校の運動部の男子よりもなんとなく体つきが良い。だけど、沙紀の手を掴む手は傷だらけで、もしかしたらどこかしこで喧嘩でもする人間かもしれない。

じつと相手の腕を見ていた沙紀は、自分の手がずっと握られている事に気づいた。

「——！？　ちょっと、いつまで握ってるのよ！」

少年の手から振り払うように手を離すと、掴まれていた手を庇うように抱きしめた。明らかな敵意を向ける沙紀にも少年の表情は変わらない。

「だいじょうぶ、沙紀ちゃん！」

駆け寄ってきた由香里に、沙紀は少年から逃げるように由香里の傍に近寄った。それを見ていた少年は、何かを諦めたように小さくため息を吐いた。

「……どうでも良いが、あんまりやんちゃしていると変な奴らに目を付けられるぞ」

捨て台詞を吐くように少年は言うと、沙紀たちに背を向けて人込みの中に消えていった。

「だいじょうぶだった、沙紀ちゃん？　怪我はない？」

心配する由香里に、沙紀はうん、と頷く。

「なんなのアイツ！　人を変な目で見て、気持ち悪い！」

怒り心頭という感じの沙紀に、由香里が困ったように笑みを浮かべる。

「沙紀ちゃんも慌てて走るからいけないんだよ」

「それはそうだけどさ……」

しぶしぶという感じで口を尖らせる沙紀は、ふとすでにどこかへ

行ってしまった少年の顔を思い出す。

何処となく無愛想な少年の顔。まあ悪くない顔だなと思い出しながらも、なんとなく沙紀は引っかかりのようなものを感じた。

「……目？」

冷たい光をした目。それがあの少年の瞳には宿っていた。どことなく自分とは違う何かを見ているような、それが沙紀の心に小さな波を起こした。

「……うう、ほんと昨日からなんなのよ！」

なんとなく災難続きな身の回りに、沙紀は思わず周囲の視線を集めることも構わず、大声を上げた。

File : 2 『Daring soldiers』

三月十一日

アメリカ合衆国ニューヨーク市から、北に位置するオールバニ。そこからさらに西へいった場所に、クーパースタウンと呼ばれる場所がある。

野球講堂と大きな湖が特徴のこの場所は、野球関連で訪れる観光客のために用意された、宿泊施設がいくつか用意されただけの比較的田舎に位置する場所だ。クーパースタウンで有名な湖のほとりの傍には、緑に囲まれた周囲を売りにするコテージ形式の宿泊施設が並んだ場所がある。

天然芝で敷き詰められた巨大な庭の中に、木造のコテージが乱立し、周囲を鉄条網が敷地を囲っていた。

コテージ内は、人ひとりが生活するには十分な広さを持っていた。リビングとキッチンが仕切りもなく一つの空間に纏められ、宿泊施設としてテレビやエアコン、大抵の設備は整えられていた。玄関から入れば通路のすぐ右側にその部屋があり、反対側に寝室が一つある。奥には脱衣所やトイレなどがあつたが、現在この場所にいる人物は、寝室の方で音を立てていた。

ベッドと小さな木造テーブル、同じく木造のクローゼットがあるだけの簡素な寝室。

テーブルの上にはトレーニング用のダンベルと一緒に、黒塗りの拳銃、USPが置かれていた。そのすぐ横で、床に手をつけながら動く人影があつた。

左手を腰の後ろに置いて右手だけで支えた姿は、腕立て伏せの状態だ。まだ日が出てきた段階の室内は薄暗く、その中で一人の少年冬木マコトが体中に汗をかきながら腕立て伏せをしていた。

「八十六、八十七、八十八……」

迷彩柄の長ズボンに、黒い無地のタンクトップを着た姿のマコト

は、腕や額にびっしりと汗をかきながら、一定のリズムで腕立て伏せを続けていく。

マコトにとっては朝のトレーニングのひとつであり、腕立て伏せの前に腹筋、背筋、倒立などの工程をすでに終えていた。

「九十七、九十八、九十九……百！」

大きく息を吐き出して、そのまま腕を立てる反動で立ち上がった。開いた部屋の窓から、心地よい風が舞い込む。

窓に取り付けられた白いカーテンが緩やかに波打ち、火照ったマコトの肌を優しく冷やしていく。

マコトはベッドの上にあるタオルで顔を拭くと、そのまま寝室を出た。

シャワーで汗を流し、キッチンに取り付けられた冷蔵庫から携帯^レ口糧^シを取り出した。表面のフィルムをはがすと、レトルト食品などに使われる袋がいくつか出てきて、その内の二つほどを沸騰させていた鍋に放り込んだ。残りの内のひとつを破いて開けると、中からプレインのクラッカーが出てきた。

それを口にくわえながら、マコトはリビングの方へコーヒーマグの入ったカップと一緒に向かう。

リビングのソファの前にあるリモコンを取ると、部屋の隅に設置されたブラウン管のテレビを付けた。

映りだした画面には、今日の夕方から始まるニューヨークでの試合の予定が、白人の女性キャスターによって報道されている。マコトは今日の試合のチケットの事を思い出しながら、テレビのチャンネルを変えていく。

クーパーズタウンとは、アメリカ野球でいえば聖地と呼べる場所だ。数々のメジャーリーガーの名前が、このクーパーズタウンにある野球講堂に収められている。

マコトは非番になると、ほぼ必ずといって良いほどこの街を訪れる。

場所は他のアメリカの大都市と比べれば田舎でしかないが、野球

に並々ならぬ思い入れがあるマコトは、こうしてアメリカの地で英気を養うと同時に、時間があればアメリカンベースボールの観戦をしに行く。

彼を知るものがいれば、彼の印象にはそぐわない健全な趣味だと感じただろう。そこに違和感があるかどうかは別だが。

マコトは鍋の沸騰する音に変化を感じると、ソファから立ち上がって鍋の下へ戻った。

コンロの上に備えられた戸棚から白い皿を一枚出して、その中に暖めていた袋の中身を出していく。

レーシヨンの中身は、白魚を塩コシヨウで味をつけ、白ワインで風味をつけたものだ。もう一方は十センチ近い長さのソーセージ。こちらには先ほど破いて置いておいた包装の中から、ケチャップとマスタードが入った袋を破いてソーセージに無造作にかけた。

アメリカの会社で作られた軍人用の携帯口糧の中では、群を抜いて味と栄養値が良いものだ。一般的な食事の調理が出来ないマコトは、廃棄予定の物や、任務であまった物を譲り受けてよく持っていた。以前、それを渋い顔で咎められた過去があるが、マコトは気にも留めなかった。

出来上がった朝食に満足そうな顔を見ると、マコトはリビングのソファに戻って本格的な朝食を開始した。

朝食を終えて着替えを済ませたマコトは、不意に外からこちらへと来る足音に気づいた。

リビングで新聞を読んでいたマコトは、新聞をテーブルに置くとジーンズの後ろに仕舞っていたUSPに手をかける。玄関のドアを叩く音がすると、マコトはゆっくりと立ち上がり、玄関へと向かった。

マコトは玄関先にあったスリッパを蹴りながら、ドアに張り付いた。ドアには覗き穴がない。自分が一時でも生活をする場所の中で、マコトが唯一この場所の欠点と上げるものだ。

「……誰だ？」

まことは抑揚のない声で、外にいる誰かに声をかけた。

「ミスターフュキ。言伝があります」

このホテルのスタッフだろうか。そう考えたマコトだが、油断せずにはドアを開けた。ゆっくりと開けるドアから外の様子を見る。開いたドアの隙間からは誰も見えないと考えた時、不意にドア越しに殺気を感じた。

「——っ!？」

マコトはドア越しに立つ相手を吹き飛ばす勢いでドアを押し開けると、外に飛び出しそのままドアの奥にいる相手に腰から抜いた黒塗りの拳銃を向けた。しかし、それと同時にマコトの眼前に同じようにグロツク１７が向けられ、

「どうやら非番の間も、身体は鈍らせてないみたいだな」

楽しそうに笑みを浮かべる白人の男がそこにいた。

「……マックス」

金髪を揺らして首を傾げるセリオ・マクスウェルに、マコトはそつと息を吐いた。

ジーンズに赤いジャケットを羽織ったセリオは、リビングに上がるとソファに腰掛けた。

「なんでお前がここにいる。確かイギリスに戻るといっていなかったか？」

同じくジーンズをはいて、黒いジャケットを羽織っていたマコトは、リビングの入口で怒った表情を浮かべながらパートナーを咎めた。

「なんでって……。俺たちに召集が掛かったから、俺がわざわざ迎えに来てやったんだろうが……」

「……召集？ 俺たちは非番だぞ。それ呼び戻すとは何か大きな事件でもあったのか？」

つい数日前に、マコトとセリオは大きな仕事を終えたばかりだ。

その成果をもつて、マコトたちには二週間ほどの休暇が与えられていた。

「さあな。詳細はまだ俺も知らされてねえ。だが、おっさんが直接俺に連絡してきたんだ。何かあったのは間違いないだろうな……」

「マーカッシー大佐が？」

マコトは、自分たちの上官であるジョイ・マーカッシー大佐の存在に、緊張を走らせた。彼は自分の時間を惜しんでまで自分たちの部隊の仕事をこなしていく男だ。その彼が他の者を使わずに、直接セリオに連絡をしてきたというのであれば、ただ事ではないのだろう。

「五分で準備をする。少し待ってくれ」

マコトは踵を返すと、急いで寝室に向かった。

ロッカーから小さな旅行バックを取り出すと、三日分の服や雑多な物を次々と仕舞っていく。ダンベルをバッグに入れて小さな封筒を手にした時、マコトの手が不意に止まった。

白と青の装飾がされた細長い封筒だ。のりは付けられず、開いた部分から今日の試合のチケットが顔を覗かせていた。

「……今日は、一番の試合だったんだがな」

マコトの無愛想な顔が微かに残念そうに歪むと、未練を断ち切るように寝室に置いてあったゴミ箱へそれを放り投げた。

三月十二日。

南アメリカから約二十キロ南西の海域。

晴天の空の下、穏やかな波の上に黒い鉄の固まりが顔を出していた。直径一五〇メートルの巨大なそれは、丸みを帯びた表面に陽光を照らす潜水艦だ。周囲にあるのは波だけで、遠くではイルカの群れが海面から飛び出していた。

艦内の通路を、冬木マコトとセリオが歩いていた。

二人はグレーの繋着形の制服姿だった。制服の腕には『UMA』と書かれたマークが取り付けられており、そのマークをつけた腕を

セリオは揺らしながら先頭を黙々と歩いていった。

「ようセリオ、マコト！ お早いお帰りだな」

マコトたちと同じ軍服姿の黒人が、手にしたバインダーを振り上げながら、セリオたちに挨拶をした。

三十代前半の油の乗った顔立ちの、角刈りの頭にどこか親しみを感じさせる笑みを浮かべてセリオたちに近寄った。

「よう、レイモンド！ まったくだぜ。こっちは都会の女の子といちゃいちゃしてたのによ。ホテルのバーで携帯を取ったら、大佐の声で呼び出し食らったんだぜ？」

「ははっ！ それはぞつとしないな」

レイモンドと呼ばれた黒人の男は、おかしそくに笑みを浮かべる。「お前はどうか、マコト？ 少なくなつた休暇は堪能出来たのか？」

レイモンドは後ろにいるマコトの方を見た。

「聞いてくれよ、レイモンド。こいつ休暇をもらつたかと思えば、ニューヨークのと田舎で、ひとりひっそり生活してんだぜ？ おかげでこいつを呼びに行くのにどんなけ車に揺られたか」

「ほう……。それはどこだ？」

「クーパースタウンだ。昨日はニューヨークでの試合を見るつもりだったんだが……」

答えるマコトに、レイモンドはああ、と口を開いた。

「クーパースは俺たちアメリカ人が愛するベースボールの聖地だからな。そうか。お前ベースボールが好きなのか」

レイモンドは嬉しそくにマコトの肩を叩いた。無愛想にするマコトの表情も、試合を観戦できなかったことの残念さから出ているのだ、とレイモンドは解釈した。

「まあ、また次の休暇の時に見に行けば良いさ。良かったら俺と一緒に行こうぜ！ お前、何処のチームのファンなんだよ？」

「ヤンキースだ」

マコトの答えに、レイモンドは渋い表情をした。

「あゝ、じゃあ俺とは行けないな。俺はレッドソックスなんですね」

じゃあな、と手を振って去っていくレイモンドに、セリオはマコトの方に視線を向けた。

「なあ。ヤンなんたらと、レッドなんとかってなんだ？」

アメリカメジャーリーグでも有名な二チームの存在を知らないセリオに、マコトは驚いた顔をした。

「……ヤンキースはニューヨークの野球チーム。レッドソックスはボストンのチームで——昔からこのふたつはライバルチームとして有名だ」

「ふん」

興味のなさそうなセリオに、マコトは不満そうに顔をしかめた。

ジョイ・マーカッサー大佐の部屋にノックが響いた。

艦内の鉄壁とは違い、コンクリートの上に壁紙が張られた部屋は、大きな木製の机と大量の本棚。無味乾燥ではあったが、知性を感じさせる空気に包まれていた。

デスクに座る白髪の男、マーカッサー大佐は、目にしていた書類を置くと入れ、と声を上げた。

鉄性の扉が開くと、セリオを先頭にマコトの二人が中に入った。

二人はマーカッサーの前で敬礼をすると、順に声を上げた。

「冬木マコト軍曹、ただいま帰還しました」

「セリオ・マクスウェル、二週間の休暇をいち早く切り上げて戻ってきました」

それぞれの言葉に、マーカッサーは顔色一つ変えずに頷いた。しかし、その変わらない表情がいつもどおりの眉間に皺を寄せた厳しい顔であることに、セリオは苦笑しながら敬礼を解いた。

「二人には悪いことをしたが、緊急の事態が起きた。悪いが少しはやく戦線に戻ってもらうぞ」

「了解です。それで、次の任務はなんでしょうか？」

マコトの言葉に、マーカッサーは重苦しい表情で頷き、先ほどデスクに置いた書類を二人に渡した。

「二日前に、日本の如月重工という会社から一本の電話が入った。なんでも会社の社長である如月智彦（かきひこ）の娘に、犯罪者が何かしらの牙を向こうとしているとのことだ」

「如月重工といえば、我々の軍部にもわずかばかりのつながりがある会社ですね」

マコトの言葉に、マーカッサーはそうだ、と頷いた。

「我々が使用する兵器や武器、それらの生産を行っている企業とも、この如月重工は資源面や技術面で大きく関わっている。その企業に、ある犯罪組織が接触を試みてきたそうだ」

犯罪組織という言葉に、マコトとセリオの表情が変わる。

「……それに、この犯罪組織はお前たちにも少なからず関係がある」
「それは、どういうことですか？」

セリオが口を開くと、マーカッサーは手元の書類を一枚二人に見えるようにデスクの上に置いた。

「君たちが数日前に解決した、ロシアの非合法研究組織。その研究を裏で管理していた組織が、如月重工に接触してきたのだ」

二人の緊張は、ここに来て驚きに変わった。

「組織名は不明だが、如月社長に接触した男たちは自分たちをその研究に関わっていた組織のものだと言ったそうだ。その時に見せられた研究資料によると、間違いなく非合法な研究によって得られた情報が記載されており、それを如月重工の研究班にやらせようとしていたらしい」

「一民間企業にそんなことをさせようとするなんて、奴らの目的はなんですか？」

「それは分からない、冬木軍曹。だが、奴らはこの話を飲まなければ、如月社長の娘である如月美穂（みほ）と如月沙紀（さき）の両名に、何かしらの実力行使を行うと言ってきたそうだ。もちろん、一民間人の命を危険にさらすことは許されないことだが、それ以上にこの組織は傍観するには危険すぎる存在だ」

マーカッサーの言葉はもっともだ、とマコトは頷く。

ロシア政府によって抑えられた研究組織では、非人道的な人体実験が繰り返され、その実験は大変危険なものであったとロシア政府は認識している。表向きはあるロシアの製薬会社による新薬開発のための人体実験だったと報道しているが、マコトたちのように特殊な事情を持つ者たちには、その真の姿の一部を掴んでいた。

「これは、後の国家間の問題に波風を立てないために、我々『非合法暗殺傭兵部隊』 - Unofficial Mercenary Assassin - の仕事だ。お前たちには日本に向かってもらい、如月社長の娘である如月美穂と沙紀を、秘密裏に護衛してもらいたい」

シークレット・エスコート
秘密裏の護衛。

官僚や要人を、護衛対象にすらこちらの存在を気づかせずに護衛する仕事だ。

暗殺や破壊工作、対象の救助などを主任務とするこのUMAと呼ばれる組織の中で、難易度の高い任務として設定されている作戦だ。こちらの存在は世間に公に出来ないため、護衛対象との接触を極力下げるというスタンスによるものだ。

こちらの条件や要求を護衛対象に知らせない分、護衛という困難な任務をさらに難しくしたこの作戦を、『シークレット・エスコート』とこの部隊は呼称する。

「良いか。御息女には絶対に我々の立場を認識させてはならない。特に今回の相手は強敵だと言えるだろう。……だが、お前たち二人ならば出来ると私は判断している。良いな？」

マーカッサーの言葉に、二人はもう一度敬礼をして答えた。

非公式暗殺傭兵部隊《UMA》の母艦とも呼べる潜水艦、セイレイヌの後方には、医療室があった。

中は十畳ほどの広さを持った部屋で、真っ白なシートが取り付けられたベッドが3つ、規則正しく横に並んでいる。その左側には、担当医のために用意された机が壁に向かって置かれていた。

白衣を着た女性が一人、机に向かって書類にペンを走らせていた。図面と一緒に書き足されている字は、英語による注釈のようだった。

白衣の女性、モリガン・ローベルの背後で、部屋のドアが開いた。スライド式の自動ドアが開くと、U M Aの制服姿のセリオが中に入ってきた。

「あら、セリオ。ずいぶん早いお帰りだったのね」

ポニーテールの金髪を揺らしながら、モリガンは立ち上がった。

中に入ってきたセリオは、ここにくるまでに何度も聞かされた言葉に、頭を掻きながら苦笑した。

「緊急の任務だね。さっきマーカッサー大佐に呼ばれたところだよ。それで、アレを貰いにきたんだけど……」

セリオの言葉に、モリガンはちよつと待って、と入り口横の戸棚に向かった。

ガラス戸を両手で開くと、薬品の入った棚からプラスチックのビンを取り出した。表面のラベルには『P - E C 2 . 3』と書かれていた。モリガンはふたを開けると、中の錠剤を数粒取り出した。

「ありがとよ。どうにもほかの医者から貰ったのじゃ、利いた気がなくてね」

「……誰から処方されたって薬は薬さ。使い方さえ間違えなければ、人間にとっては頼りになる相棒よ」

モリガンの言葉に、セリオは違いねえ、と笑みを浮かべた。

セリオは受けとった錠剤を、ズボンのポケットから取り出したカプセルに入れた。スライドして開くアルミニウムのケースに、丸い錠剤が消えていった。

「今回は何処に？」

「ああ。極東日本の中心、東京だってよ」

「あら良いじゃない。なにかお土産を期待してるわ」

セリオはモリガンに礼を言つと、医務室を後にした。

もうすぐセイレーヌが海面に浮上する。その準備で動いている兵

士たちは、医務室のそばには誰もいない。セリオは手にしたままのロケットを首にかけると、甲板に出るために通路を進んでいった。

星の輝く夜空の下で、セイレーヌはその姿をさらしていた。

浮上したばかりで鉄の表面はまだ濡れていて、格納庫から上がったエレベーターの中で、セリオはセイレーヌの甲板の上で発信準備をするヘリへと歩いていった。

輸送用ヘリの入口前で、冬木マコトが待っていた。

回転するプロペラが巻き起こす風に煽られ、マコトの黒髪が風に遊ばれていた。

「遅かったな」

「なに、戻って早々に任務だったからな。船の女の子たちに挨拶してきたんだよ」

冗談とも取れる言葉で答えながら、セリオは輸送ヘリに乗り込んだ。セリオが奥の座席に乗り込むと、マコトは送り出しの兵士に挨拶をして、中に乗り込んだ。

プロペラの回転が上がり、風音と共にモーター音が音を上げる。

ふわりと浮き上がる感触を感じながら、マコトはヘリの中から外を見た。

「どうした？」

じつと丸い窓から外を見つめるマコトに、セリオが首の後ろで腕を組みながらその後姿を見た。

「いや。またこの船を見ることが出来るのか……。いや、なんでもない」

マコトの言葉が、ヘリのモーター音にかき消される。

それぞれが複雑な表情を浮かべた二人を乗せて、ヘリは果ての見えない海の上を飛んで、セイレーヌから離れていった。

File : 3 『時を読む少女』

風が舞っていた。

穏やかな日差しと春風に、集まったみんなは涙を流していた。

みんな黒い洋服を着て、草原と墓石で囲まれたこの場所で、静かに
お母様の最後に涙していた。

お父様の涙を見たのは、後にも先にも初めてだった。

黒い喪服姿のお父様は、手に白いハンカチを握り締めて俯いていた。
私たち姉妹には今まで見せたことがなかった、悲しみの表情。
お父様のもう片方の手に妹の沙紀さきが手を握られて、やはり同じように
泣いていた。

沙紀はお母様が死んでしまってから、毎晩私の横のベッドで泣いていた。

私は泣きじゃくる妹をあやしてあげた手で、黒いドレスを着た妹
の肩にそつと手を置いていた。

私が着ているドレスと同じ、黒いドレス。

お手伝いさんに着せられた私たちは、お父様の手に連れられてこ
こまで来た。

「ほら、美穂みほ。お母さんに最後の挨拶をなさい」

お父様にそつと背中を押されて、私は前に出た。

縦に長く掘られた穴。

その中にすっぽりと納まった棺桶の中に、真っ白な花に包まれた
お母様が眠っていた。

本当に、ただ眠っているだけのように見えた。

沙紀がいつものようにわがままを言ってお母様を困らせたら、心配
したお母様が起きてくれるんじゃないだろうか。そんな事を考え
ながら、私はお母様の組まれた両手の上に、同じ白い花をそつと置
いた。

花を置くときに触れてしまったお母様の指先は、いつものお母様の温かい手ではなかった。

係りの人に下げられて、私はじっと立ち尽くしたまま棺桶が閉じられていくのを見つめる。きれいなお母様の顔は、ふたをされてもう見れなくなった。

沙紀が、また泣いている。

私の身体にすがり付いて、延々と泣いている。

私は涙が出なかった。

何が悲しくて、何がつらいのかが分からなかった。

ただ私の中には、どうしてあの時に私は何も出来なかったのだろうという後悔だけが残っていた。

二〇〇四年 三月十四日。

都内で有名な女子高があった。

経済界から政治家、要人の娘がなんの因果があつてか集まつてくる私立の学園は、日本の街中にあるのにその姿はどこか異質だった。ヨーロッパ様式の建築で作られた建物。外界を遮断する壁が敷地を囲み、敷地の中はそこだけが別世界だった。

中央にある『W』の形をした校舎。その西側に小さな噴水を囲むように置かれたベンチがあった。

昼休みのそこには、白いセーラー服を着た女生徒たちが集まっていた。

昼食の弁当もそこに、ベンチに座る一人の少女の周りを、十人以上の女生徒たちが取り囲んでいた。

「如月さん！ 次は私を見てくださいな」

女生徒たちに囲まれた少女は、白いセーラー服姿で長い髪を横で束ねていた。三月の空はそろそろ春がそこまで来ているのか、暖かな日差しを落としていて、彼女たちを照らしていた。

どこかのお嬢様のように見える女生徒たちを前にしても、ベンチに座る彼女の容姿は見劣りするものではなかった。

目立たないように贅を尽くした姿の周りとは違う控えめな化粧とは裏腹に、どこか物腰の柔らかなしぐさで、彼女は笑みを浮かべていた。

「はい、よろこんで！」

取り囲む彼女の言葉に彼女、如月美穂^{みほ}は膝の上においていたそれを手に取った。

夜をイメージする絵柄の描かれた、縦に長いカードの束。直径一二センチ程のそれは、小さな美穂の手から少しはみ出すように握られ、彼女はそのカードを切っていく。

タロットカードだった。

美穂は切ったタロットカードを相手に渡し、同じように切ってもらう。帰ってきたカードを上から五枚取り、それを伏せたままでもう一度相手に差し出した。

「一枚引いてください」

カチューシャをつけた女生徒が、恐る恐るといった様子で一枚引いた。

表にしたそれを見て、美穂は少し考えるような表情をしてそれを見つめた。

「西園寺さんは、最近なくし物をされましたね」

美穂の言葉に、西園寺と呼ばれたカチューシャの少女が驚いたような顔をした。そんな彼女を見て、美穂は柔らかな笑みを浮かべてその様子を見る。

「なくされた物は、そうですね。アクセサリーではないでしょうか」

「あ、合ってます！ 私、去年の誕生日にお父様からいただいた指輪を、一昨日の晩に失くしてしまってます……」

「その日、どこか水のある場所へ行かれませんでしたか？ お風呂などの建物の中ではなく、外の方で……」

美穂の言葉に、女生徒は少し考えるようなそぶりを見せた。

「そつえば……。あの日はお母様の庭の手入れを手伝って、外の水場や噴水の周りにいった記憶があります」

彼女の言葉に、美穂は笑みを深くした。

「今日お帰りになったら、その場所を探してみてください。きっと、探し物がみつかるはずですよ」

美穂の言葉に、少女はうれしそうにはい、と答えた。

なくし物をしたことを言い当て、失くしものの場所を告げる美穂に、周囲の女生徒たちは騒ぎたて次は自分をと声を上げた。

私立翠峰^{すいほう}学園と書かれた門の外れに、一台のスポーツカーが止まっていた。

真っ赤なカラーリングが目立つツィーシートの車があり、そのそばの塀の先にある木の上に人の姿があった。

敷地内の木の上で、葉を影にして双眼鏡を握る金髪の男がいたのだ。

「へえ、あの美穂ってお嬢ちゃん。占いなんかできるのか……」

学園の庭の様子を見ていた男、セリオ・マクスウェルは、女生徒に囲まれる美穂を双眼鏡から覗きながら、空いた手でヤキソバパンを頬張る。

「さすがは如月重厚の娘さん。通ってる学園もすごいけれど、周りのお友達も金持ちのお嬢さんばかりだな……。どの子でも良いからお近づきになりたいもんだね」

むしゃむしゃとパンを頬張りながら、セリオは右の耳に当てているヘッドホンに意識を集中する。

ヘッドホンからは庭で話をする美穂たちの会話が聞こえていた。

そこから聞こえる西園寺や三島の名前、三島は今なおその規模を持つ如月重工と派を競う一大企業。西園寺は、この都内近辺ではちょっとは名の知れた俗にいう警備会社の様な存在だ。

『あれ、如月さん。服に何かついていらつしゃいますよ？』

先ほどヘッドホンから聞こえてきた西園寺という名前の少女が、美穂の白いセーラー服に何かを見つけたようだ。

「……げっ、やばー!」

ヘッドホンから流れる西園寺の声が大きくなる。まるで、マイクに近づいて声を発しているような感じた。

『なんでしょう、これ？』

『さあ。ちいさな鉄の塊みたいですけど……』

『ちょ！？ バカ！ 止めろって……！』

セリオは双眼鏡に目を凝らし、美穂の前で何かを持つ西園寺と呼ばれるカチューシャの少女を見る。手元には豆粒の様な小さな物を指で弄んでいる。

セリオが持つ光学式の双眼鏡が、それが先ほどセリオが特殊な銃を使って美穂に向けて取り付けけた盗聴器だった。

『なんか、表面がべだべたしますね。……おそらくゴミでしょう。捨ててしまいますね』

弄ばれた盗聴器は指の力に負けたのかパキッ、という音を立てて壊れた。もともと丈夫なものでもない。西園寺によつて地面に捨てられる盗聴器を双眼鏡で追いかけたセリオは、深くため息を吐いた。

「……はあ。せっかく取り付けたのに……。あとでもう一度美穂ちゃんに取り付けるか」

盗聴器が外されて落胆したセリオは、そのまま双眼鏡から目を離して木の上に寝転んだ。

木の上で寝そべりながら、セリオは肉眼で中庭の様子を見る。楽しそうに学友と話をする美穂に、セリオは穏やかな笑みを浮かべてつぶやく。

「とりあえずは彼女の周囲に怪しい人物はいないみたいだが……。いつまで俺はあのお姫様のお守りをしなきゃなんないのかね……」

美穂の父親である如月智彦（ともひこ）に接触してきた相手を考えれば、樂觀的な判断はとれない。それくらいはセリオにも理解していることであり、だからこそこうして人目を忍んで、美穂の護衛をしている。いざとなれば学園内に飛び込んで、姿の見えない敵の銃弾から彼女を守る事も必要になる。

「とはいえ、この学園のセキュリティ。そんじょそこらの警備とは

訳が違うんだよなあ」

セリオが寝そべる木のそばには、細長いポールの先に括り付けられた監視カメラが設置されている。セリオが今いる場所をずっと映し出しているが、その監視カメラのレンズには、ガムテープで固定されたモニターが取り付けられていた。

監視カメラが撮影する映像を一日分盗み出し、それを延々とカメラに写していた。セリオは今いる場所が美穂の行動範囲を一望できる場所だと判断し、自分が居座る場所に異常を感じさせないように、ウソの映像を監視カメラに見せていた。学園内の警備員は、監視カメラの映像を確認する場所で、今も誰もいない敷地の木を見ているにちがいない。

「これじゃ、猫一匹入り込むなんてできないぜ……。敵が動き出すなら、やっぱり学園を出てからだな……」

そうと分かれば、セリオは身体を起こして塀の外に止めておいた車の方へ飛び降りる。

「とりあえずは、マコトと合流してそれから必要な物を取ってくるか……」

盗聴器は美穂の居場所を突き止めるための発信機の役目も果たしていた。早急に代わりの盗聴器をマコトに持ってこさせようと懷から携帯電話を取り出し、

「……おい、ウソだろ」

セリオは車のボンネットに張られた紙を見て、ぽかんと口を開けた。

それは、路上駐車を取り締まるステッカーだった。

放課後を伝えるチャイムと共に担任の男性教師が教室を出ていくと、教室は学校から解放されたことににわかに騒がしくなった。これから訪れる自由な時間を喜ぶ生徒たちの姿は、私立でお嬢様学校と呼ばれる翠峰学園すいほうであつてもそれほど変わるものではなかった。

如月美穂きづき みほは帰り支度を終わると、教室に残っていたクラスメイト

たちに挨拶を交わしながら教室を後にした。

「……如月さん！」

正門へと向かう途中、美穂は後ろから声をかけられた。

振り返ると、カチューシャをつけた白いセーラー服の少女、西園寺が美穂の下へ走ってくるころだった。美穂は立ち止まって西園寺を待つと、軽く息を乱しながら西園寺は美穂の前で止まった。

背中まで届く黒髪を乱しながら通学カバンを両手で持った西園寺は、待っていた美穂に笑みを浮かべた。

「如月さん。お帰りですか？」

「はい。西園寺さんは……いつもお家の方がお迎えに上がってましたね」

美穂は正門にいつも止まる西園寺の車を思い出す。黒塗りのリムジンに乗った初老の男性が西園寺を迎えに来るのを、美穂は時々見ていた。

「ええ。近くなので歩いてこれる距離なんですけど……。お父様が何かと厳しい人なので」

美穂と西園寺は話をしながら正門へと歩き出した。

正門にはいつもどおりに西園寺の家の車があり、運転手の男が西園寺を後ろの席に乗せると、車の窓が下りた。

「……美穂さん。今日の昼休みはありがとうございました。家に着いたら探してみますね」

窓から顔を出した西園寺は、切れ長の瞳を弓にして美穂に笑顔を向けた。

「早く見つかると良いのですが……」

「美穂さんの占いはよくあたると伺ってますもの。きっと見つかると思います」

では、と西園寺が告げると、車は音もなく走り去っていった。西園寺に乗せた車を見送ると、美穂は他の学生たちと同様に帰り道を歩き出した。

放課後の街は学生やサラリーマン、主婦たちの姿で溢れかえって

いる。みな一日を終えて、もしくは最後のひと踏ん張りをするために動き出している。

美穂はそんな人ごみの中で、信号が変わるのを待っていた。横断歩道の前には疲れた表情のサラリーマン、小さな子供をつれた母親の姿や自分と同じ学生が同じように信号が青になるのを待っていた。美穂の前では道路を何台もの車が走り去り、全体が街の流れを作り出している。そんな中にいる美穂は、この横断歩道が苦手だった。車が通り過ぎる場所を歩く。それに抵抗がある美穂は、歩道橋があればそちらを使うほどに徹底している。それは、美穂の母親がこの横断歩道の上で車にはねられたからだ。

美穂の白いセーラー服の襟元が、冷たい汗で湿っている。

普段はこれほどまで抵抗を感じる美穂ではなかったが、それはここ数日の夢見が原因だった。

暗い、とても暗い夢。

たくさん悲鳴の中で横たわる自分。遠くで聞こえる救急車の音に、誰かが自分を呼ぶ声。抱き上げられる血まみれの自分の身体。

(やっぱり、歩道橋を探そうかしら……)

思ってみても、美穂はこころ辺では歩道橋がひとつもないことを知っている。街中の歩道橋の数と位置は、すべて頭に入っている。一番近い歩道橋を目指しても、どちらにせよこの横断歩道を通らなければならぬことを美穂は分かっていた。

美穂はなるべく道路から離れるように、一歩後ろに下がった。横断歩道のそばには美穂と同じくらいの女子高生が二人と、先ほど見た子供と母親が立っていた。

美穂は自分と同じ白いセーラー服の女子生徒の後姿を見ながら、正門で別れた西園寺の言葉を思い出した。

「美穂さんの占いはよくあたると伺ってますもの。きっと見つかると思います」

美穂の占いは、学園では人気だった。何人も探し物や困り事を解決してきた実績もあった。美穂も占いの手順とノウハウを幼いころ

から勉強してきた。それは、誰かの役に立ちたかったからだ。

美穂の目の前に横たわる縞模様の白線。

自分の目の前で真つ赤に染まっていく母親の姿を前に、まだほんの幼い美穂はただ震えていた。

人のために何かをしたい。そう考えた美穂が手にしたのは、数時間先の未来を予言する占いという存在だった。はじめは自分の占いが当たることはなかった。妹や父親を占ったり近所の人を占ったりとしたが、幼い子供の占いは誰も信用せず、そしてその占いに力はなかった。

それが、いつ頃から当たるようになったのか。

自分の占いが当たることはうれしかった。自分に占う力があることを知って幼い美穂は喜んだ。これで誰かのためになると思った美穂だが、しかし今はその実績がなんとなく息苦しかった。

数日前から見るようになった夢。

美穂は占うと同時に予知夢のようなものを見るようになった。

最初は父親が疲れて帰ってくる時間を夢に見た。なんとなく夢の内容を鮮明に覚えていて、夢を見た日の晩に、父親が帰ってきた。本来ならその日は帰らないはずの父親の帰還。玄関のドアを開く父親の姿と、玄関に置かれていた置時計の時刻まえ覚えていた。そして、そのとおりに父親は帰ってきた。

そんな事があって、美穂はなんとなくここ数日は横断歩道を歩くのをためらわれた。

「西園寺さんのように、明日から車を出してもらいましょうか」

母親がなくなってすぐの頃は、小さいこともあったが道を歩きたがらない美穂のために、父親が車を用意していた。それも中学に上がる頃には美穂はなんとなく止めていたが、それはいつまでもおびえてばかりでいることが嫌だったからかもしれない。しかし、今はそんな事よりも不安の方が美穂の心を占める割合が高かった。

帰ったらお父様に相談しよう、そう考えた美穂は、

「きやああああ——！！」

目の前で上がった声に顔を上げた。

横断歩道の前に立っていた母親が、顔を手で覆いながら悲鳴を上げていた。母親のよこにいたはずの子供がいない。見れば、歩道橋のほうに子供が飛び出していた。

横断歩道に転がる小さな人形、それを拾おうとしていた子供の場所へ、ブレーキ音を立てる一台の乗用車の姿があった。

「――駄目！」

車が止まる気配がない。迫りくる車を前に、子供は顔が青ざめていた。

乗用車のバンパーが子供にぶつかりそうになる前で、白いセーラー服が舞った。

子供を抱えて道路の反対側へと転がっていく姿。子供を腕に抱いて転がる姿は美穂だった。

「あぶない！！」

誰かが声を上げた。

美穂は腕に抱いた子供を肌で感じながら、顔を上げた。すると、対向車が横断歩道の上で転がる美穂の眼前に来ていた。

美穂は一瞬で目の前が真っ白になる。同時に、危惧していた映像が目の前でかぶったような気がした。

「ばかやろう！！」

美穂の耳元で声がした。同時に美穂の腰元が思いつきり持ち上げられた。

美穂はとつさに何がおきたのかが分からず、それでも腕に抱いていた子供を放すまいと腕に力を込めた。

クラクションとブレーキ音。周囲の悲鳴が上がるなか、美穂が立っていた反対側で人垣が割れた。

道路から歩道に飛び込んできた影に、信号を待っていた人々が逃げるように輪を作った。

正方形のコンクリートが敷き詰められた歩道の上で、三人の人間が転がった。

一瞬、その場の音が一切なくなり、

「……ふ、ふえええええん!!」

美穂の腕の中で小さな男の子が泣き声をあげた。

それを確認して、強く目を瞑っていた美穂はゆっくりと目を開けた。

汚れた美穂のセーラー服の中で、横になりながら青い服の男の子が泣いていた。腕をすりむいたのか、小さな二の腕に擦り傷があった。だけど、

「無事、でしたのね……」

男の子が助かったことに、美穂は安堵した。と同時に、自分もまだ生きていることに美穂は驚いた。自分と子供をはねようとしていた車は、今は交差点の手前側で止まっている。横断歩道には黒いタイヤ痕が出来ており、道路の両側で『（ ）』を描くように線が引かれていた。

自分たちはどうして助かったのだろう、と考えたところで、美穂は自分の腰に腕が回っていることに気がついた。美穂を抱えるように子供の服をつかんだ腕。筋張った腕が男のものだと分かる。肘から手首にかけて、地面についている方が思いつきり擦り切れていた。美穂は思わず身体を起こすと、視界に赤い色が見えた。

一瞬血かと思った美穂は、しかし袖を捲くった赤いジャケットであることに気づいた。ジャケットの襟元にかかる金色の髪。真っ白な肌をした男は、小さくうめくと睫毛の長い目を開けた。

まるで、宝石の様な青い瞳だった。

艶のある唇がかすかに動き、男の青い目が美穂の姿を捉えた。

「……無事か？」

どうみても外国人にしか見えない男は、流暢な日本語で美穂に問いかけた。

「はい！ 私もこの子も大丈夫です！ 貴方が助けてくださったんですね！」

あわてた様に大声を上げる美穂に、男、セリオ・マクスウェルは

ゆっくりと身体を起こした。

人ごみはすでに元の流れを取り戻していた。たまたまあった歩道のベンチに、セリオと美穂は座っていた。男の子は母親に連れられて病院へと向かった。誰かが呼んだ救急車が一台やって来て、美穂とセリオは子供と母親を救急車に乗せたのだ。

美穂は子供とセリオに挟まれる形になり、奇跡的に無傷だった。今もう一台救急車が来るからと救急隊員に言われた美穂は、セリオの腕の血をハンカチで拭きながら待っていた。

「いつ痛う！」

傷口に触れるハンカチに、セリオは軽く顔をしかめた。

「あつ！ すみません！ 痛いですか？」

申し訳なさそうに、ハンカチを当てる力を加減する美穂^{みほ}に、セリオは大丈夫だ、と答えた。

「それよりも……、子供が危ないからって、いきなり飛び出したら君が危険だろう。なんであんなことしたんだ？」

セリオの言葉に、美穂は手を止めてセリオを見上げた。

「それは、あの子が危なかったからとしか、言えません……」

美穂は申し訳なさそうに俯いた。

しかられた子供の様な表情に、セリオはあゝ、と言って頭を掻く。「いやまあ。別に責めてるわけじゃないんだ。ただ、気味みたいなか弱い女の子がすることじゃないだろう」

言い訳するセリオの言葉にも、美穂は俯いていた。

「たとえ自分の命が危なくても、助けないわけにはいかなかったんです……」

困っていたセリオは、美穂の言葉にきょとんした。

「なんだ。どこかのお嬢様かと思ったら、ずいぶんと芯の強い子だな」

お嬢様、と言われて気恥ずかしくなった美穂は、顔を赤くしながら顔を上げた。お嬢様じゃないです、と言おうとした美穂は、セリ

オが笑みを浮かべているのを見て声を失った。

まるで、無邪気な子供の様な笑みに、美穂は体温がぐつと上に上がってくるのを感じた。

「まあ、人助けも良いけどほどほどにな。君に何かあったら親御さんが悲しむぜ」

セリオはそういうと、ベンチから立ち上がった。

「え、どこに行くんですか!？」

歩き出したセリオに、美穂はあわてて立ち上がる。

「もうすぐ救急車が来ます。念のために病院に行った方が……」

引きずるようなセリオの足取りに、美穂は駆け寄ろうとする。だが首だけで振り返ったセリオは、先ほどと同じ子供の様な無邪気な笑みを浮かべると、片手立てをあげて歩いていった。

取り残された美穂は、止めようと伸ばした手が宙ぶらりんになっているのに気づいて、その手を抱き寄せた。

人ごみにまぎれていくセリオの背中に、美穂はつぶやくように口を開いた。

「貴方は、何者ですか……?」

街の路地裏で、ポリバケツを蹴飛ばす音が鳴った。

中に入っていた黒いゴミ袋の中身をぶちまけながら、セリオ・マクスウェルは汚れたコンクリートの壁に寄りかかった。

「いつ痛う……。こんな擦り傷つくるなんて、予想外だったぜ」

予想外といえば、如月美穂きづき みほの行動も予想外だった。

まさか、子供を助けるために道路に飛び出すなんて、セリオはまったく考えてなかった。おかげで、美穂の後ろをずっとついていたセリオは、慌てて彼女を助けるために飛び出すことになった。

「まさか、目の前で護衛対象が交通事故にあつたら、大佐にどんな大目玉を食らうか……」

あの年中眉間に皺を寄せたマーカッシーの顔を思い出し、セリオは苦笑する。

「……それで、護衛する人間が怪我なんかしていたら世話ない話だな」

ジャケットの袖を捲くったセリオの腕を、後ろから誰かが叩いた。

「いつてええ！！ 何しやがんだよ！！」

振り返ったセリオは、あきれた表情をするマコトを睨んだ。

「自業自得だ。もっとやりようがあっただろう。そんな傷をこさえて任務に支障が出たらどうする」

「こんなのただのかすり傷だってえの！ それに、あの美穂ちゃんのおかげで子供も無事だったんだ。彼女に傷だつてつけてない」

そうか、と言いながらマコトはもう一度セリオの傷口を叩いた。

「いつてえ！ だから止めろつての！！」

「大丈夫だ、細胞は死んでない」

そういう話じゃねえ、と抗議するセリオに、マコトは無視してジーンズの後ろから携帯電話を取り出した。ただの携帯電話ではなく、液晶には東京都内の地図と共に、二つの光点が光っている。

「如月美穂に発信機はつけられたようだな」

画面を確認するマコトにまあな、とセリオは答えた。

「助けたついでに、彼女の制服の襟元に取り付けておいた。これで誰かに外されることもないだろうよ」

「なら、後は二人の護衛は俺がしておく。今日の夜にはシャンフェイもこちらと合流するから、今のうちに手当てをしておけ」

マコトの言葉に、セリオは顔を青ざめさせた。

「シャンフェイの姉さんも来るのかよ！？ なんでまた……」

「発信機の話をしたら、お前だけだと心配だといって、大佐に願い出たらしい……。良かったな、心配されて」

「それは信用されてないっていうんだよ！ よりによって姉さんが来るのかよ……」

とほほ、という言葉がうなだれるセリオの頭上に浮かび上がった。「それよりも、先ほどの車は無関係か？」

顔を上げたセリオに、マコトはうなずいた。

「先ほど警察官に事情を聞かれているのを確認した。ただの一般人だった。それに、如月重工にたいする接触は、まだ最初の一回しかない。如月重工がこちらの姿勢を示してはいない分、相手が動き出すのはもう少し先だろう」

「そうかい。じゃあまあ、今のうちにちよつくら休ませてもらいませうかねえ」

「休んでよいとは言っていない。早く手当てをして来い」

「人使いが荒いこつて……」

やれやれとため息を吐いたセリオは、そのままマコトに背を向けると路地裏の奥へと去っていった。それを見送ったマコトは、不意に背後に気配を感じて振り返った。

振り返った先は、表通りの明かりが漏れている通路があるだけだ。そこには誰もいない。

「……気のせいかな？」

マコトは周囲をもう一度確認してから、セリオとは反対側へと歩いていった。

人ごみにまぎれて表通りを歩いていくマコトに、遠くから視線を向けるものがいた。

同じように人ごみに溶け込むように立ち止まる人影。清掃業者の名前がついたクリーム色の作業着を着た男は、右頬に傷のある男だった。

男は人ごみに消えていくマコトの背中を見送ると、小さくつぶやくように唇を動かした。

「……あれは、カムイかな？」

File : 4 『嵐の前の静けさ』

部屋の一边を窓ガラスにした部屋が、茜色の空によって染め上げられていた。

外の景色を背にした調度机の椅子に座り、部屋の主である如月智彦が受話器を手にしていた。

「マーカッシーさん、どういうことだ！　うちの娘を守るのがあなたたちの仕事だろう！　それを、あわや交通事故に合わせかけるとはどうなっているんだ！？」

罵倒するような言葉遣いをしながらも、如月社長は額に汗を浮かべながら、左手に持った万年筆を力強く握り締めている。今にも折れそうな万年筆が、受話器から聞こえてきた声に鈍い音がした。

『お怒りはごもつともです、如月社長。ですが、今回の件は貴方のお嬢様がご自分で、道路に出た子供を助けようと飛び出したに過ぎません。それに、ご息女は私の部下が助けた事により、傷ひとつおつてはいません』

家の手伝いの者から、娘の美穂が病院で検査を受けている事を知らされた如月社長は、すぐにU M Aに繋がる番号をコールしていた。それは、雇った者が肝心の仕事をおろそかにしているのでは、という事も原因のひとつではあった。

「……それで、その車は奴らが差し向けたものではないのかね？」
如月社長は言いながら、数日前にこの社長室を訪れたジェリベルという男の事を思い出す。

こちらとのやり取りを遊びのように楽しむ顔を、如月社長は思い出しただけで苦虫を潰したように歪めていく。日本を背負っているこの如月重工のトップを前にしての振る舞い。自分に対してなんの敬意も畏れも持たない不遜な態度。心底自分という存在をどうでも良い様に見るジェリベルの顔に、如月社長は無意識のうちに恐怖を抱いていた。

あの男は、企業トップの重役どころか道ですれ違う通行人だろうと、間違いなく殺す事ができる。きっと、それは奴が気に食わないの一言で片付けられる理由で怒りうる現実味を帯びた予想だ。

「車の方は、まったくの無関係でした。あの後部下に後を付けさせましたが、ただの民間人の車でした。貴方に接触した者たちとの繋がりは一切ありません」

電話越しの言葉に、如月社長はやっと落ち着きを取り戻したように大きくため息を吐いた。しかし、今度は忙しく持っていた万年筆を指でもてあそぶと、それを机の上に置いて引き出しから煙草を取り出した。

「それと、奴らからの連絡はまだないのですね」

電話の言葉に、如月社長はああ、と低く答える。

「約束の日には今日だが、まだ奴らからの連絡は来ていない。私の直通回線を教えたから、掛かって来るとしたらこの電話からだ」

如月社長は、本来な今日の仕事はすべて片付けていたが、この社長室を離れる事はしなかった。如月重工がジェリベルたちに加担するかどうかの返答を聞く電話を、今日かけてくる予定だったからだ。「それから、言つてあると思うが私には娘が二人いる。君たちの方で娘たち二人のどちらを狙っているのかは分らないのかね？」

「それは、はっきりと断定してお答えする事は出来ません。奴らが貴方の意思を確認していない現状では、表立った動きもないためにこちらから尻尾を掴む事は出来かねます。ただ、私の軍人としての勸を言うならば……」

一度途切れる電話の声に、如月社長は小さく息を呑んだ。

「何かね、マーカッサーさん。言ってくれたまえ……」

煙草をケースから取り出した如月社長の手が、持った煙草ごとへし折るように腕に力を込めた。

「ならばはつきりと言いましよう。奴らに従う意思がない事が知られば、貴方のご息女である沙紀^{さき}さんも美穂^{みほ}さんも危ういでしょう。ロシアでの事件ですが……。こちらで掴んだ情報では、研究職員を

除いた研究所の人間は、ほとんど殺されていたとの事です。奴らがその気になれば、貴方の命とて危険にさらされるでしょう」

「……っ！？ ならば、どうすれば良いと言うのだ！！」

『落ち着いてください、如月社長』

落ち着いてなどいられるものか、と如月社長は机を掌で大きく叩いた。木を打ちつける乾いた音が社長室に木霊し、机の上に置かれた手からは、つぶれた煙草がへの字に折れ曲がっていた。

『私たちにお任せください。如月重工に送った部隊は、必ず貴方をお守りするでしょう。ご息女に当てた者たちも、必ずお二人を守つて見せます』

「……信じて良いんだな？」

『それが、我々の任務です……』

電話から聞こえる落ち着き払ったマーカッサーの声に、如月社長は何かを諦めたように頂垂れた。すると、ドアからノックをする音が聞こえ、如月社長は顔を上げた。

「社長……、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。持ち場に帰ってくれ」

表に控えている秘書の言葉に、如月社長ははつきりとした声で答えた。ドア越しから失礼しました、という声が聞こえると、社長室は元の静けさを取り戻していた。

『それでは、奴らからの電話にはくれぐれも慎重に……。また、絶対に我々の存在に気づかれぬように気をつけてください』

「分かっている……。私には君たちしか頼れる者がいないのだ。頼んだよ……」

最善を尽くします、という言葉を聞くと、如月社長はそのまま受話器を置いた。

都内からやや離れた夕暮れの住宅街の一角に、築数十年を思わせる高さ三十メートルのオンボロアパートが建っていた。

表面の塗装はほとんど剥げ落ちており、一階に取り付けられた郵

便受けは、元の色を失って真っ赤な錆で新しく塗り固められている。ポストは三ヶ所入り口に四つずつ取り付けられており、薄汚れた灰色の壁に設置されたポストには、新聞やチラシが無造作に差し込まれているものもあった。ほとんどが名札など付けられておらず、チラシが差し込まれたポストにも住人の名前など書かれてはいなかった。

誰がいるのかも、本当にいるのかも分からないそのオンボロアパートは、周囲の高級住宅街には不釣り合いなその姿を広い敷地を有して聳え立っていた。

そのオンボロアパートに向かう人影があった。

黒いブーツでコンクリートの道を踏み鳴らし、青いデニムの長ズボンの上に真っ赤なジャケットを着たシルエツトだ。を履いた、青い瞳が夕暮れ時の明るさにも染える金髪の男である。

セリオ・マックスウェルだ。

セリオはオンボロアパートの真ん中の入口に入ると、二列に並んだ三つのポストの上段右端の扉を開けた。

中には何もなくて、セリオは西洋人特有のピンと立つ鼻を小さく鳴らすと、開けたポストの横からはみ出す新聞を勝手に引っっこ抜いた。今日の夕刊を片手に、夕食の材料が入ったビニール袋を片手に、セリオは染みついた階段を上がっていった。

三階にある『B302』号室は、セリオ・マックスウェルと冬木マコトがねぐらとして借りた部屋だ。借り手のいないこのオンボロアパートも、セリオ達にしてみれば道路を挟んで如月宅が見える絶好の監視場所だ。

赤い屋根が染える如月宅は、二階建てにロフトと屋根裏が付いた一軒家だ。二階の南側に如月姉妹の部屋の窓が見えるため、オンボロアパートのベランダから、二人の部屋の様子を見ることが出来た。セリオは元は緑の塗装がされていたドアを四回、不規則なリズムでノックすると、少しして内側からチェーンロックを外す音がかちやかちやと聞こえてきた。中からドアノブが回されてドアが開くと、

薄暗い玄関から無愛想なマコトが顔を出した。

「……遅かったな」

「近くにスーパーがねえんだもん。ちょっと足を伸ばしたんだよ」
外の通路で『スーパー桃栗』と書かれたビニール袋を軽く持ち上げて、セリオはそれをマコトに見せた。

「近くにコンビニがあっただろう。どうしてそこで済ませなかったんだ？」

マコトは文句を言いながら扉を完全に開け、セリオを中に引き入れた。

小さな段差と申し訳程度に置かれた靴棚のある玄関を抜ければ、これまた数歩歩けばすぐに部屋に着く廊下をマコトは通り過ぎる。廊下の途中にあったキツチンには使われた形跡はなく、流しには水を出した形跡もなかった。

そんな無味乾燥なキツチンの上にセリオは持ち帰ったビニールを置くと、セリオはマコトの後を追って部屋へと移動した。

縦長に広がる十六畳程のフローリングリビングは、埃が乗った傘が備え付けられた電球によって、薄暗く照らされていた。部屋中央に四人ほどが楽に座れるテーブルと椅子が置かれており、上には分解された拳銃や組み立てた狙撃銃、アサルトライフル等が無造作に置かれていた。テーブルの上は銃器だけでなく、銃に込める弾が箱詰めされており、そのそばには弾がセットされたマガジンが三本置かれていた。

日本の家ではまず見ない無骨なシルエットも、入り口の反対側の壁にくつつけるように置かれた、ベッドふただけという殺風景な内装には不思議と溶け込んでいた。

生活するための場所ではなく、獣がその身体を休めるためだけにある場所。まさに、ねぐらという言葉が相応しい部屋だった。

玄関からちょうど対角線上に伸びた右側のベランダに、三脚で固定された望遠鏡が置かれていた。高倍率を可能とする軍事目的で作られた偵察用ゴーグルは、赤外線式である事を示す赤いレンズがは

め込まれていた。まっすぐに伸びた望遠鏡は、カーテンレールに掛けられた暗幕から顔を覗かせ、窓ガラス越しに向かいにある如月宅を捉えていた。

マコトは望遠鏡に戻ると中を覗き込んだ。

「監視目標はどうだ？」
ターゲット

セリオは椅子に座りながら、テーブルの上に持っていた新聞を放り投げ、その横に置かれていたマガジンをひとつ取り上げた。セツトされた弾の状態を確認して、それを組み立ててある方の拳銃に装填すると、レバーを一度だけ引く。冷たい金属が噛み合う音が部屋に響くと、セリオは照正と照門を合わせて壁に向けて構えを取った。「今のところ問題はない。姉の美穂みほは先ほど家の車で家へと入った。妹の沙紀さきも俺が駅前のCDショップで出会った後、そのまままっすぐに帰宅している。姉の美穂は分らないが、妹はずっと部屋にいるようだ」

「戻る時にぐるっと家の周りを見てきたが、怪しい人影は何処にもなかったし、な……」

セリオは座った姿勢から構えた銃を左に動かし、銃口の先をマコトの側頭部へと合わせた。セリオは照門の先から見えるマコトのしかめっ面を見ると、構えを解いておどけるように銃をテーブルに戻した。

「奴らが動くとしたら今夜からだろう……。如月重工が奴らと敵対する意思を示せば、いつ奴らが動き出すかは分らん」

「本番はこれから、てな……。なら、その前に俺たちはやらなきゃならない事をやっておくと思いますか！」

セリオは椅子から立ち上がると、気合を入れるように腕を上げて伸びをした。セリオの言葉に振り向いていたマコトは、やる気のあふれる笑みを浮かべたセリオの横顔に、無愛想な顔を向けている。

「やっておく事とはなんだ？ 探知機の設置は完了している。こうして監視をしている状況で、可及的すみやかに実行するべき事には検討がつかないのだが……」

「一々かたつ苦しく考えんなよ。腹が減っては戦は出来ないうてのは、この国のコトワザだろ？　まずはメシにしようぜって話だよ」

疑問を口にするマコトに、セリオはため息を吐きながらキッチンの方へと歩き出した。その言葉に惹かれるように、望遠鏡から離れたマコトの腹の虫が、盛大な合唱を始めた。

気が緩んでいるな、とマコトは考えたが、それを差し引いても思いついた空腹には耐えられない。一度戦場に出れば三日三晩飲まず食わずは日常的だが、今から気を張り詰めすぎてはいけなйдらう、とマコトもセリオの考えに同意した。

「なら、俺も食事にしよう。確かバックパックの中に、持ってきた携帯口糧があつたはずだ……」

「あんなのは、食事がままならない戦場で食うもんだらうが！　その偏食はいい加減治せよ……」

「むっ……。栄養価は問題ない。摂取する栄養に偏りはないはずだが？」

そうじゃねえって、とキッチンからセリオのため息が聞こえてきた。

「お前の分も作ってやるから、そっちは後にとっておけ……」

それこそ、こんな日本の街中で使い時など一生やってきそうになり、とマコトは声を上げそうになるのを飲み込んだ。自分の分も作ってくれるというのだから、自分が何かを言う資格はないとマコトは思ったのだ。

マコトは自分のベッドに置かれているバックパックから視線を外すと、ふと思いついた疑問に首を傾げた。

「マックス……。お前は料理が出来るのか？」

マコトの声に、セリオが心外そうな顔を通路の影から出した。

「ばあか。俺の腕を甘く見るなよ。絶対にお前にうまいって言わせてやるからよ」

「それは楽しみだ。期待させてもらおう……」

マコトはその顔にわずかばかりの笑みを口の端に浮かべると、テ

ーブルの上を片付け始めた。分解されていた拳銃を組み直し、セリオの狙撃銃であるPSG1とアサルトライフルを壁に立てかけると、ふとセリオが先ほどテーブルに置いた新聞に目が行った。

綺麗に折りたたまれた新聞は、無理やり何かに押し込まれたのか、端が軽く曲がっている。それを拾い上げたマコトは、正面の見出しに視線を止めた。

スポーツの試合結果が書かれた内容に、マコトはなじみのある言葉をいくつも確認していく。

「日本のベースボールか……」

たしか日本では『野球』というのだったな、と思い出しながら、マコトは休日の日に見る予定だったメジャーリーグの観戦チケットを思い出した。まだ試合が見れなかった事を引きずっている自分に苦笑したマコトは、新聞をセリオのベッドに放り投げると、テーブルの片付けを再開した。

壁に取り付けられた装飾の明かりが、豪奢な部屋を照らしていた。薄黄色い明かりに照らされて、ツインベッドや高級品だと分かる桐の調度品となる机やクローゼットが、陰影をつけて部屋の厳かな空気を作り出している。床には丁寧な刺繍が縫いこまれた絨毯が広がっていて、その上に黒い皮製の靴がツインベッドの横で絨毯の表面を凹ませていた。

ベッドに座るのは、黒いスーツ姿で襟元のネクタイをだらしなく緩めたジェリベルだった。

ジェリベルはベッドの横に置かれていたテーブルの上にある電話を取ると、受話器を耳元に当てていた。その顔は薄っすらと笑みを浮かべていたが、そこに子供がいれば一目で泣き出してしまうだろう程に、瞳が怒りでギラついていた。

「……それは、どういうことですかね？」

吐き出す言葉はいたって冷静に紡がれてはいたが、電話を持つ左手は今にもその正方形の形を割り砕いてばらばらにしてしまう程、

茶色く筋張った指に力が込められていた。

『何度でも言おう……。我々はお前たちのような犯罪者に手を貸すような事はしない』

電話の相手、如月社長の声はどこか強気な色を浮かび上がらせていた。仕事と家族が大事なだけのつまらない男だと思っていたジェリベルは、見事に如月社長に噛み付かれて激怒していた。

「では、貴方の娘さんたちがどうなっても良いというんだな。ただの脅しだと考えているのなら、貴様はすぐに後悔する事になるぞ？」

すでに丁寧な言葉遣いを使う気もなく、ジェリベルの低く、まるで心臓を鷲づかみにするような怨嗟の聲が、鋭く突き刺さる。ジェリベルの声に電話越しから如月社長の息を呑む音が聞こえたが、そんな事ではジェリベルの心中は晴れはしない。

「覚えておけ。貴様の部屋に娘の生首を届けてやろう。それを見た後でもう一度電話をする……」

『お、おい！ 待て……っ！？』

ジェリベルは相手の言葉を待たずに、受話器を乱暴に電話へと戻した。そのまま電話をテーブルに叩きつけ、ジェリベルはベッドから立ち上がり、

「お前たち！ 退屈な監視は終了だ！！ 奴らを少しからかってやれ！！」

叫ぶジェリベルの背後にはいつの間にかいたのか、ふたつの人影が気配を消して立っていた。

片方は小柄な男だ。まるで獣のような鋭い目をジェリベルに向けて、口を真一文字にして小さく頷いた。もう一人は、細いウエストが部屋の明かりから浮かぶ女性の姿だ。女性はジェリベルの言葉に小さく笑みを浮かべると、真っ赤なルーージュを引いた唇を動かした。

「可愛い女の子の生首を用意すれば良いのかしら、ジェリベル？」

艶のある英語が女性から告げられ、ジェリベルは面倒くさそうに顔を歪めて、部屋の窓へと向かう。

「とりあえずはどちらか片方を捕まえる。それで反応が変わらない

のなら、お前の好きにすれば良いさ」

ジェリベルの言葉に、女性はうれしそうに声を鳴らすと、二人を置いて部屋を出て行った。それを見送る事もなく、ジェリベルは窓から見える夜の東京の姿を見下ろす。

「すぐに後悔させてやるぜ、ジャップが……」

ジェリベルの背中から溢れ出す怒気に、部屋に残っていた男はじつとその獣のような目を向ける。明かりに照らされた男の右頬には、消える事のない傷が刻まれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8655v/>

Winged Angels ~片翼の天使たち~

2011年9月13日19時58分発行